目立つつもりは無かった。なのにどうしてこうなった！？

流離人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
目立つつもりは無かった。なのにどうしてこうなった！？

【Ｎコード】
Ｎ０３７３Ｒ

【作者名】
流離人

【あらすじ】
目立つつもりは無かった。ただ学校で普通に学んで普通に卒業して、そして街のために働く。ただそれだけの筈だったのに・・・！

第1話　入学試験

木の葉と小枝が顔に当たって痛い。
後ろからは３０体以上の使役獣が追いかけて来ている。

（いくらなんでもこれは多すぎる。広い場所に出なきゃ！こんな草木が生い茂った場所じゃ剣を振り回すことは出来ない！）

現在受験生は孤島に来ており、教師陣の召喚した使役獣達を倒す事が試験である。
使役獣は倒されるとバッヂに変わり、バッヂに書かれたＧ～Ｓまでのランクによって点数が来まる。

追い回されている青年は身長１７０ｃｍ程、背には鞘に入れられた身の丈もある大剣を背負っている。

大剣はむしろ鉄の塊と言ってもいい位だった。
武器の持ち込みは刃引き（刃を削って切れなくする）をしているために許可されていたため愛剣である。

しかしあまりに大きすぎるために周りに物があると振れないために、今の状況では無用の長物である。

突然に視界が開ける。
（広場だ！）
そこは既に合格した受験生の屯する待機場所だった。
突然現れた青年に受験生達はざわめきをもって迎え入れる。
そこに殺到する使役獣達。

青年はおもむろに大剣を抜き、中段に構える。
そこからは死闘だった。
森から数多くの使役獣が襲いかかってくる。
青年は大剣を振り回して全ての獣を真っ二つに切り裂くか、剣の腹をもって叩き潰した。
見る見るうちに青年の周りがバッヂに埋まっていく。
最後の獣がバッヂに変わると、試験官がバッヂを拾い集めて顔をひきつらせる。

「君、名前は？」

青年はぶっきらぼうに答える。

「レストリア。レストリア＝ウェズディ」

「受験番号６２９番、レストリア＝ウェズディ！ランクＢ１４枚、ランクＡ１０枚、ランクＳ・・・９枚。よってテクティーナ教導院入学実技試験を合格とする！！」

周りがざわめく中、レストリアは木の幹にもたれかかり、静かに目を閉じた。

このざわめきが何を意味するかも知らずに・・・。

第1話　入学試験（後書き）

初めましての方は初めまして！

流離人（さすらいびと）と申します。

これからどうぞ宜しくお願いします。

紹介

【レストリア＝ウェズディ】

平民出身の青年

受験番号６２９番

大剣使いで身の丈もある得物を使う

【テクティーナ教導院】

テクティーナ教務侯爵（公爵と同位）の経営する

貴族・騎士の子弟が多く通う中、平民も通うことが出来る珍しい教導院

教導院内では貴族・平民の区別は表面上一切無い

【爵位】

公爵≧特務侯爵（教務侯爵・神殿侯爵など）＞侯爵＞伯爵＞子爵＞男爵

公爵の当主を大公と呼ぶ。

国全体の順位としては

国王＞公爵＞特務侯爵≧侯爵＞伯爵＞子爵＞男爵

国王＞神官長＞大神官＞司教＞司祭・神官
国王＞騎士団長＞師団長＞大隊長＞中隊長＞小隊長＞分隊長＞一般兵
となる。（物語の中でも説明しますが）

ちなみに、もし身の丈の剣を背負って鞘から抜こうとしても抜けま
せん（笑
その辺りは物語と言うことで（笑笑

第2話　初めての友人

テクティーナ教導院

レグルス大陸に多数ある教導院の中で、最も生徒が少なく質を重視する院である。

生徒総数わずか４５０人。
１クラス５０人で３クラス、それが３年ある院なのだ。

クラスは希望制だが、実際に割り当てられるのは順位が上の者からだ。
クラスは「武術科」「魔法科」「総合科」の３つである。
別にどれが特別優れているわけではない。
そのとおりであるため、希望するクラスは生徒によってばらばらである。

生徒は６割が貴族、２割が騎士、１割が商人、１割が平民の子供である。

希望がばらばらとはいえ、人気の高い総合科は非常に入りにくい。
貴族や騎士の子供は幼少期から家庭で教養を施されているために、入学段階でもそこそこに成績がいい。
そのため、総合科はここ５年ほどは貴族・騎士の子息・令嬢だけで構成されていた。

神宣暦７８年

テクティーナ教導院では驚愕的な出来事が起こっていた。

『平民出身が主席で総合科に入学』

王族や軍閥貴族を差し置いての主席は、教導院創設以来のこの出来事に、
生徒達は不審な目を彼、レストリア＝ウェズディに向けていた。

入学後１週間は、下宿や引越し等、新たな生活に慣れるために休みが設けられる。
休みとは言っても、さまざまな説明があったり、上級生の授業の見学が許されているのである。

レストリアは荷物が少なかったために下宿を１日で済ました後、授業を見学せずにぶらぶらと院内で過ごしていた。

～～～～～テクティーナ教導院　食堂　カフェテラス～～～～～

庭師によって整えられた芝生の上でレストリアは１人昼食を取っていた。
黙々とサンドウィッチを食べていたが、彼は心のうちで眉をひそめていた。

（視線がうっとうしい・・・）

隠すつもりがないのか、周りからは多くの視線を感じる。

半分は興味本位、残る半分は嫉妬であろう。
質を高く求めるテクティーナ教導院は、他院と比べて卒業後の就職率が格段にいい。
主席ならばなおさらである。つまりは箔が付けられるのである。
それを奪われた者たちはレストリアを逆恨みしているのだ。

そこにふと1つの影が彼を覆った。

「・・・ん？」

振り返ると、そこにいたのは茶髪で短髪に揃えた一人の青年だった。
彼は屈託のない笑みで、弁当片手に手を上げていた。

「よっ。よかったら一緒に食わねぇか？」

レストリアは突然の訪問者に驚きを隠せないでいた。
自分を知らないのか、知らなくても周りの空気が読めないのか、
レストリアは心のうちで自己問答していた。

「別に深い意味はねぇよ、ただ仲良くなりたいだけさ。学年主席じゃなくてお前個人の方とな」

「何のために？」

「友達となるのに意味が必要か？」

「いや、いらないな。俺はレストリア＝ウェズディ。知っての通り平民出身だ」

「俺はハルドルーク＝ベネスター。一応貴族の嫡子だ。特に気にしてねぇが、な」

レストリアはハルドルークの言葉に目を丸くした。
“一応”の付く貴族ではない。
ベネスターといえばこの国で代々軍団長を歴任する公爵家の姓だった筈だ。
平民の自分からすれば公爵家の顔など知りはしないが、
その家の異名なら知っている。

【万槍】

槍を扱えば勇者や英雄さえも追随を許さない軍閥である。
（ハルドルークも相応の実力を持つんだろうか？・・・それにしても）

「ハルドルークか、呼び辛いな」

「ハルクでいいさ。そっちは・・・レスティって呼ばせてもらっていいか？」

「ああ、構わない。これからよろしくな」

「友達によろしくも何もないとは思うが・・・。まぁよろしく。さ、食おうぜ」

「そうだな。早く食って帰りたい」

「もう帰るのかよ？午後の授業見ていかないのか？」

「どうせいつかは習うんだ。見る意味など無くないか？」

「確かにそうだが、知っているのといないのじゃ、結構変わってこないか？」

「・・・そうだな。見ていくか。どこを見る？」

「総合科の武術の授業だな。学問は見てもつまらんだろうし」

「分かった。じゃあさっさと食べるか」

拝啓　愛する妹よ

兄ちゃんには友達が1人出来たよ。
誰もがびっくりする意外な人物だけど。
順調とは行かないけど、結構楽しめそうだ。
体に気をつけろよ？

お前の兄より

第3話　理由

（全くどいつもこいつも気に入らねぇ）

ハルドルーク＝ベネスターはまだ始まってもいない教導院生活に辟易していた。

ハルクが朝、登校するとすぐに知らない生徒達に囲まれていた。

（いや、知らなくはないが・・・。貴族共の立食会とか晩餐会に出席するのが嫌でしぶしぶ教導院（ここ）に来たってのに、何で似たようなことになってんだよ。ズール子爵の次男にヌヌス子爵の三女、それにベレナード侯爵の八男。糞爺め、こうなることを分かってやがったな）

ハルクはここに入学することになった原因の実の祖父に怒っていた。

「では、ハルドルーク様、失礼します」

「ああ、じゃあな」

ようやく七面倒な会話から解放されて、

ハルクは心の内で喜んでいた。

（もう昼か。ってことは数時間話してたのかよ。今日は上級生の試合を見るつもりだったのに。全くうざったい奴らだ。まぁいい、今日もレスティと一緒に飯食いに行くか）

ハルクは教導院の外で買った超高級弁当を手に教室に向かった。

（教室・・・・・・・いない）

ついで講堂に、

（・・・・・・いない）

カフェテラス

（・・・・・・・・・・・・・いない。あれ？どこにいるんだ？）

仕方なくハルクは近くにいた1年総合科の生徒に声をかけた。

「なぁ、レストリアがどこにいるか知らないか？」

「これはこれはハルドルーク様、私めにお声をかけて頂き光栄です」

相手の生徒は振り返ると優雅に一礼した。

ヒュール伯爵家が嫡子、ガルドレンだ。

ガルドレンは貴族意識が強く、ハルクの苦手なタイプの人間だ。

（別に貴族意識の高い奴は大量にいるから別に構わんが、こいつは特になぁ。人選を間違えたか）

「しかしレストリアと仰いましたか？あいつのような平民如きがあなたと知り合いというだけでも許すまじ事ですな。そもそもあなた様ほどの方は友でさえ・・・」

「なぁ・・・」

自分でも驚くべきほど低い声が出た。
声に殺気がこもっていることにハルク自信驚きを隠せない。
しかしガルドレンは殺気には気付かずに続ける。
「はい、なんでございましょう？ハルドレーク様も思い直して・・・」
「なぁ、いつから子爵位のお前が侯爵位の俺に意見できるようになったんだ？」
「え、あの、それは・・・」
ガルドレンはここに来てようやく自分の失言に気がついた。
しかし時すでに遅く、彼はハルクの逆鱗に触れていた。
ハルクは自分のお気に入りを悪く言われることは例え親でさえも許さない。
「それにな、お前如きがレスティの事をアイツよばわりしてんじゃねぇ。殺すぞ？」
ガルドレンは口をパクパクさせ、顔を真っ青にしていた。
足はガクガクと震えて今にも卒倒してしまいそうだ。
ハルクはそれを許すまいとガルドレンの顔面を掴み上げていた。
「もう1度聞くぞ？レスティはどこにいるんだ？」
「あ、あの・・・と、図書館で、み、見ま・・・した」
ハルクはガルドリンを振り払って身を翻した。

レスティのいる図書館へ向かうために。

〜〜〜〜〜1時間前　図書館〜〜〜〜〜

レストリア＝ウェズディはふと調べ事をと思い、朝から図書館を訪れていた。
5冊目の本を読み終わり、6冊目を探しに席を立った。

（ヴァーグ大戦史は・・・と。あれ？さっきここら辺にあったけど、どだれか借りちゃったかな？）

「君、探してるのはこれかい？」

不意に声を掛けられ、振り向くと、緑髪で眼鏡をかけた人のよさそうな青年が立っていた。
青年の手にあるのは目的の一本（ヴァーグ大戦史）。

「ああ、そうだ、貸してくれるか？」

「うん、勿論だよ。僕はもう読み終わったからね。でも次からは気を付けた方がいいよ」

「何をだ？」

「この図書館は貸し出しもしてるからね。読みたいものが先に決まってるならその分だけ机に置いておけばいいんだよ。そうじゃないと今回みたいに誰かに持って行かれちゃうからね」

「そんな事が出来るのか。何冊でもいいのか？」

「何十冊とかは流石に無理だろうけど、１０冊ぐらいなら良いと思うよ」

「へぇ、教えてくれてありがと」

「こんなことでお礼を言うなんて君もマメだね」

「ん？何かの教えを得たらお礼を言うのが当たり前だろ？」

「貴族は皆金品を払うだけなんだよ。それで誠意を見せたって言うんだから笑っちゃうよね」

アハハと言って、青年は肩をすくめる。
青年は眼鏡を中指で押し上げて続ける。

「そう言う点では君はかなり特異だよ。レストリア＝ウェズディ君」

「俺の事を知ってるのか？」

クスと苦笑してレスティの座っていた席の向かいに座る。

「君の事を知らない生徒の方が、今の教導院には少ないよ」

「そうなのか？」

「『歴代１位の総合成績で入学した平民出身の総合科』騒がれない方がおかしいからね。君は今大注目だ。良い意味でも悪い意味でもね」

レスティも座り、本を置く。

「悪い意味ってのは？」

「貴族連中はプライドが病的なほど高いのさ。君は何も悪くないのに彼等は君が悪いと騒ぐ。知っての通り教導院には年齢制限はない。実力さえあれば3歳児でも１００歳でも入学できる。今の院にいる中で最年少は同学年の１３歳。次いで僕ら１８歳だ。それでも騒ぐ奴等はまるで赤ん坊だよ。自分たちの言い分が通らなければ騒ぐ。思い通りにいかなければ権力を使う」

レスティは今後を想像して頭を抱えた。

それを見て青年は続ける。

「まぁ、唯一の救いは院の経営者のテクティーナ老公爵がキチンとした人だってことだね。公爵に意見できるのは王族ぐらいなものだよ」

しかし、青年は表情を暗くして、

「でもね、それでも権力を笠にした嫌がらせはあると思う。それも執拗な、ね。それには気を付けてね」

「・・・それはわかってる。入学する前から覚悟していたことだ」

諦めたようにレスティは言い放つ。

青年は再び微笑んでレスティに尋ねる。

「ねぇ、君は何でここに来たの？いや、変な意味じゃなくてね。純粋な疑問なんだ。普通の商人でさえもここの教育費さえ払えない。

平民じゃ尚更だよ。それに貴族は教養の為、騎士は訓練の為、商人は商売相手を探す為とメリットがあるけど、平民には無いんだ。それで不思議に思っててね」

「おれは妹と二人暮らしでな。妹を守るために修行してたんだ」

「・・・御両親の事を聞いても？」

「妹が生まれてすぐに死んだよ。山賊の襲撃に遭ったんだ」

レスティは何ともなさげに言った。

「それは・・・すまない」

「別に構わないさ。それでも生きるためには金がいる。一応、妹も俺も軽い仕事をしてたんだが、それじゃあ護ることなんてできないからな。必死に働いて地元の院を卒業後に自警団に入ることにしたんだ。自警団は給与もそこそこあるしさ。でも、俺の親友がギルドで金を稼いでここを紹介したんだ。俺は親友に詰め寄ったよ。当り前さ、地元の院は近くて1年。ここは遠くて3年だ。その分だけ妹を守れなくなる。そしたら親友は何て言ったと思う？」

青年は考え込んでいて、顔を上げ、

「まさか・・・騎士に？」

レスティは失笑して続ける。

「そのまさかさ。俺みたいな奴に騎士になれと言う。騎士は給与もたくさんだし、実力も付くって。その間は俺が妹を守ってやるって。

俺は悩みに悩んで妹に打ち明けたさ、どうすればいいかを。心の中全部吐き出して、みっともなく涙も流して。そして一蹴された」

青年は首をかしげる。
その行為は顔の整っている青年がすれば、
まるで絵画にでもありそうなほどだ。

「一蹴？」

「ああ、私に構う暇があるなら働いて私をセレブな生活をさしてって。俺はあいつの兄だからな。あいつがどんな思いで言ったかぐらい分かるさ。あいつは親の愛をほとんど知らない。そのあいつが俺に言ったんだ。それがどれだけ辛かったか。だから俺は入学を決めたんだ」

暫らく2人の間に静寂が訪れる。

「そうか。強いな、妹さんは」

「ああ、自慢の妹だ」

「ふぅ、長話をしてすまなかったね。もう昼だ。失礼させてもらうよ。本は受付で生徒証を見せて借りるといい。じゃあね」

青年は手を振り、図書館から出ていった。

レスティは本を借りて図書館から出ると、
そこでハルクに出会わした。

「あれ？ハルクじゃん。どうした？」

「ん～、昼飯一緒に食おうぜ。お前は何してたんだ？」

これさ、と言って本を見せる。

「は～、勉学だねぇ。まぁいいや。どこで食う？」

「昼飯買ってないから食堂だな。行こう。そう言えばさっき人の良い貴族みたいな人にあったぜ？」

「ふ～ん。なんて奴だ？」

「・・・あ？名前聞いてねぇ」

「あっはっはっは。なんだそりゃ」

拝啓　愛する妹よ

兄ちゃんは人の良さそうな貴族（？）に出会ったよ
名前は聞き忘れたけど今度聞きたいな
良い友達になれるだろうな

友達になったら、
前の手紙の友達と一緒に紹介するよ

お前の兄より

第3話　理由（後書き）

爵位について

王族＞公爵位＞侯爵位＞伯爵位＞子爵位＞男爵位＞騎士位

公爵は王の血縁者が王位継承権を捨てる際、
特に功に優れた者がなる爵位です。
（その後の世襲はある）

また、当主の子供達は、当主の爵位の一つ下となります。
つまり、公爵の子供達は侯爵位となります。
当主を継ぐ際に、新たに王より公爵に任命されます。
しかし、子供達は位こそ侯爵ですが、
当然のことながら権限は特にはありません。
ただ当主継承権ぐらいな物です。

よって本文中では、
ベネスター公嫡子ハルクは侯爵位
ヒュール伯嫡子ガルドレンは子爵位
となります。

第４話　初授業

レスティ達は今日、初めての講義が行われることになっていた。
……なっていたというのも、時間になっても先生が来ないのだ。
呼びに行こうにも、まだ代表者もきまっておらず、
何より担当の先生の名前すら知らないのだ。

そんなわけで講堂は今だ現れぬ先生の話で持ちきりだった。

それは筆頭貴族であるハルクもその１人だった。

「なぁ、レスティ。先生って誰だと思う？俺はジャスレー様だと思うんだけど」

尋ねられたレスティは逆にクラスで一人落ち付いていた。
なぜならば・・・

「名前だけ言われても知らねぇよ。俺は都（みやこ）の事は何も知らねぇんだから」

「あぁ、それもそうか。ジャスレー様は宮廷魔導師だぜ」

【ジャスレー＝マクレガー】
クラス：宮廷魔導師・元図書院司書長
王＞元老＞（魔導元帥＞宮廷魔導師）＞（魔導政務官＞各政府魔導師）
性別：男
年齢：７２

「ふーん。宮廷魔導師ってあれだよな？エリート様だよな？そんな奴が、たかが教導院に教えに来るのか？」

「ここは貴族の生徒も多いからな。将来有望な生徒も多いから有名人も来るんだ」

そう言ってからハルクはこそっと付け加えた。

「使えない貴族（バカ）を少しでも使えるようにする為でもあるんだぜ」

これにレスティは一瞬ポカンとし、意味が分かると失笑した。

「成程な。王は結構考えてるんだな」

「そうさ、王は偉大な方だ。常に民たちの事を考えて頭を悩ませてる。悩みの種は様々だ。貴族たちの横暴や魔物達の横行、それに最近不穏な動きを見せている西の大陸の事とか様々だ。俺も早く一人前になって王のお力になりたいんだ」

子供のように目を爛々と輝かせながら語るハルクを羨ましそうに眺めていた。

その視線に気付いたハルクは正気に戻り、

「こほん、あー、なんだ？そのー、えー」

しぞろもどろに誤魔化そうとするが、言葉は何も出てこない。

「おーい、お前たちー、そろそろ静かにしろー、授業始めんぞー」

突然講堂に響き渡った声に全員がギョッとして教卓を見つめる。

そこにはいつの間にか髭をしっかりと蓄えた男が立っていた。
服はヨレヨレで宮廷魔導師に配給されているローブを羽織っていた。

「・・・ミューズ・・・クロスシュタイン様」

1人の生徒がぽつりと声に出すと同時に、
先程までとは比べ物にならないほどの喧騒が講堂を包み込んだ。

「・・・誰だ？あのぼさぼさのおっさん」

レスティのツッコミに、ハルクは冷静に返した。

「お前の服や髪もぼさぼさだけどな。それにあの人はまだ28だぞ。
あの人は学者で・・・」

【ミューズ＝クロスシュタイン】
クラス：客員宮廷魔導師・魔法学者（古代魔法専攻）
性別：男
年齢：28

「おいそこ黙れー。俺が今日から3年間『総合』、つまり魔法と武術の融合を、戦闘術を主に教える。名前はミューズ＝クロスシュタインだ！質問は受け付けるが授業に関連したことしか受け付けねぇからな！」

ミューズはレスティ達を叱りつけると、軽く説明をした。
どうやら学者に加え戦闘術も出来るようだ。

その時、後ろの方の生徒が大きく手を上げる。

「おう、どうした？」

「あの「おい！」」

生徒の声をさえぎってミューズは叫ぶ。

「宛てられたら立ちあがって名を名乗る、それが常識だろうが！」

慌てて少女は立ち上がると赤面しながら声を張り上げる。

「は、はい！アンナ＝ハレンス子爵家二女です！」

「爵位はどうでもいいが。何だ？」

「先生はえ・・・武器は何を使うのでしょうか？失礼ながら戦った時の話をあまり聞いたことが無いのですが・・・」

（得物って言おうとしたのか？見た目通りのお嬢様じゃないのかもしれないな）

レスティはそんな事を考えながらミューズの言葉を待った。

「武器？剣に槍、それに鉄甲（ナックル）だな。教えるのは一応何でも出来るから安心しろ」

そう言うと女生徒を座らせて、白紙のメモ用紙を回した。

回ってきた紙を見ると、やはり裏も白紙で全員が頭に『？』を浮かべている。

「全員、筆記用具は持ってきてるな？今からそこに全員自分の使う武器を書け。名前もな。書いた紙は他の生徒に見せることはないか

ら安心しろ。書いたらペンを置いて顔上げろ」

ミューズは全員が顔を上げたのを確認すると、手のひらに魔力を集め始めた。

集まった緑の光は分散して机上のメモに触れると、

紙はミューズの元へと集まって行った。

ミューズは一枚一枚確認していき、自分のポケットへとしまう。

「おう、特に異質なものはないな。よかったよかった。あったら教えるのが面倒だからな。次の授業から教材を使うから用意しとけよー。あ、あと自分用の練習武器もなー。鍛練場受付で木剣と刃引きした鉄剣の両方売ってるはずだ。木剣は入学と同時に貰ってるよな？だけど鉄剣も買っておけ。持ち込み武器は次回はいらん。というか持ってくるな！邪魔だ！」

そう言い残してミューズは講堂を出ていこうとする。

しかし体半分出た所で振りかえり、

「あ、そうだ。俺は本館の４階にある部屋にいるからな。そこにちゃんと俺の名が書いてあるから分かるだろ。ノックは忘れんなよ？忘れたら・・・処分対象だ」

「適当そうな人だったなぁ。結局、何者なんだ？ミューズ先生って」

頬杖をついてレスティはハルクに尋ねた。

「繰り返すけどお前も相当適当だぜ？ミューズ様・・・先生は古代魔法について研究してる学者さんでな。１８歳で召喚魔法の黄道十二宮の存在を確認。２０歳で１２個全ての魔法陣を発掘。２５歳で精神干渉魔法に対する結界魔法を創造。それらの功績から２５歳の若さで宮廷魔導師に抜擢。まぁ実際は受けなかったけど、代わりに客員魔導師として招かれたんだ。けどまさかあのミューズ様が俺達の先生になるとは・・・」

「何でそんな人が先生なんかになったんだ？だって先生なんて時間潰すだけだろ？学者と一緒に出来ないだろ」

ムスッとしてハルクは、

「そんなもん俺が知るかよ。そんなに気になるなら聞いてみたらどうだ？」

「聞くほどあの人に興味はないな。・・・そういえば、お前の得物ってやっぱり槍なのか？」

その言葉にハルクは腕を組んで大げさに悩んで見せた。

「それなんだよなぁ～。どうすっかなぁ」

「どうした？得物が槍なことに何か問題あるのか？」

「実はさぁ、槍って俺の家で俺のお家芸なわけじゃん？」

「ああ」

「そうなると、訓練のためとはいえ、むやみに技とかを見せちゃまずいんじゃないかなって思ってさ」

レスティもそれには少し頭を悩ませ、
ふと何かに気付いて顔を上げると、

「でもさ、槍って、言っちゃなんだけど使い手は多いだろ？でもいまだにベネスター家が槍の名手として君臨しているんだからある程度は見せてもいいだろう。それともあれか？少し見せた程度でベネスター家の地位が揺らぐ程度のものなのか？」

「舐めるなよ。ベネスター家の槍の密度は比べ物にならないんだぜ。・・・でも確かにその通りだな。サンキューな、レスティ。相談に乗ってくれて」

ハルクは腕を解くと軽く笑う。
レスティも笑い返して、

「気にすんなよ、この程度。俺達友達だろ？」

「おお！ついにレスティも俺の事を友達って呼んでくれたな！！」

ぐぐっとハルクはレスティに近付く。
逆にレスティは後ろに下がり、身を翻す。

「う、うるせぇな！ほらっ！今日は街の飯屋行くんだろ！？早く行くぞ！」

「なぁなぁ、今友達ってさ」

２人は陽の傾く中、おいしい飯屋に向かって歩き始めた。

拝啓　愛する妹よ

兄ちゃんは今日初めての授業だったよ
先生は適当そうな人だったけど、
今日は説明だけだったから実際には次回からだな
最近はいつもハルクと一緒に行動してるよ

アゾットは元気か？
あいつは今日はどうしてる？
畑か？ギルドか？
あいつの事だから休んでることはないんだろうな
おまえはあいつみたいにならずにしっかり休憩とれよ？

あいつにもそう言っておいてくれな

お前の兄より

第5話　戦闘演習

雲ひとつ無い晴天。
今日は外に出かけるには絶好の日和である。
そんな中グラウンドにいるのは５０人の生徒達。
各々の手には自身で持ってきた愛用の武器を持っていた。
それは剣やら槍やら斧やら、人によっては棍棒やブーメランやチャクラムもいた。

グラウンドの端の木陰で、レスティとハルクは話し込んでいた。
レスティは気にもたれかかり、ハルクは胡坐を組んで座り込んでいる。

「レスティの得物は変わってるよな。背中の大剣は試験の時に使用したやつだろ？」

レスティは背の大剣を抜いて地面に突き立てる。
そして剣を傾けて刃を指差しながら、

「ああ、コレは特注品なんだ。刃は軽くつけてて、切るというより叩き潰す感じだな」

「やっぱりそうか、俺には鉄の塊にしか見えねぇな。それじゃあよ・・・」

ハルクはレスティの腰を指差した。
その指の先、レスティの腰には柄頭から鞘の剣先まで純白の倭刀が吊り下げられていた。

「その綺麗な刀は何なんだ？飾りか何かか？」

「いんや、これも実用物だ。これは俺の親友からの貰い物なんだ」

「ふーん。見せてくれね？」

レスティは腰から外してハルクに手渡した。
ハルクはゆっくりと鞘から刀を取り出す。
取り出した刀はぼんやりとだが、確かに白く輝いていた。
再び鞘に納めるとレスティに返した。

「これ、かなりの業物じゃねぇか。倭刀は専門外だけど俺でもわかるぞ」

「そうみたいだな。俺も貰った当初は驚いたよ。何で貰えたのか、今でも分からん」

「そうか、それは「おい！全員集合しろ！！」・・・どうやら先生が来たようだな」

グラウンドの中央を見ると、そこに訓練用のロングソードを携えたミューズが立っていた。
服装は講義時と比べて軽装になっており、動きやすさ重視となっている。

「よし、全員集まったな。これより戦闘演習を始める。まずは2人1組になれ」

その言葉に従い、生徒達は着々とメンバーを決めて次の指示を待つ。
レスティもハルクと組むことに決まり、同様に待つ。

この時、ハルクと何とか組もうと他の生徒達は動いていたが、
それをハルクは一蹴していた。

「・・・よし、全員相手は見つかったな。じゃあ次は「すいませーん、遅れましたー」」

そこに1人の青年が駆けて来た。
緑髪でメガネを掛けている。

「あれ？お前は・・・」

レスティは呟いていた。
そう、彼はレスティと図書館で話していた青年だった。

「おう、話は聞いてるぞ。お前が特別に編入してきたクリディアネスだな。レストリアと知り合いみたいだから一緒の班に入れ。お前達の所だけ3人1組だが、まぁいいだろう」

「何だあ？お前らもう知り合いだったのか？」

ハルクの疑問にクリディアネスは、

「そういえば君と自己紹介してなかったね。僕はクリディアネス＝ヴァレリアン。クリスって呼んで下さいね。武器は魔法と杖術です」

【クリディアネス＝ヴァレリアン】
ヴァレリアン公爵が嫡男。
ヴァレリアン公爵は、代々元老および魔導元帥の任に就いている。
クリディアネスは基本6属（雷・炎・水・地・樹・風）の中位までと補助魔法を使えることから、

【全魔師（オールマイティ）】の二つ名を持っている。

レスティは図書館での話で貴族に対して苦言を言っていたのを思い出して、
クリスのことを不可思議に思っていた。
それに気付いたクリスは人差し指を唇に当てて微笑んだ。

「あの時のことは秘密でお願いします」

何のことか分からないハルクは首を傾げるばかりである。

そうしている間にミューズは地属性魔法で３０ｍ四方の舞台を作り上げていた。

「じゃあ始めるぞ～。１試合目はベネスターチーム対ウィンドネルチームだ」

【レーネ＝ウィンドネル】
ウィンドネル子爵家嫡女
ウィンドネル家は珍しくも平民達との結びつきも強い。
御家芸は風魔法と体術である。
髪は金髪で長く伸ばしており、眼は碧眼。

レーネの横に使えるのは幼さの残る、騎士剣を携えた青年。
彼の名前は清風（きよかぜ）。レーネ付きの騎士見習いである。
髪は黒で短くそろえられており、目も漆黒だ。
この容貌から・名前から大陸の東方に位置する国、ジパング出身であることが窺える。

「最初に試合をする1人以外は舞台から降りろ」
3人は最初に誰が出るかを話し合った。
「どうする？」
「俺はパスだな。クリスが言ったらどうだ？」
「僕？まぁいいよ。レスティ、君に僕の強さを見せてあげる」
クリスを残して舞台を降りた2人。
レスティは腕を組んで泰然と立つハルクに疑問をぶつける。
「なぁ、クリスって強いのか？」
「そりゃあな。他はどうかは知らねぇが、三大貴族には内外ともに敵が多い。俺も暗殺者に殺されかけたのは一度や二度じゃない。だから生き残るための術を付けさせられるんだ。それに俺達は将来の陛下の武具。俺の家は陛下の槍、クリスの家は陛下の知識、残る一つの家は陛下の防具なんだ。その当主が無力でいるわけにはいかないんだ」
「そうか、確かにその通りだな」
かんたんに決まったハルク側とは違い、相手側では一悶着が起きていた。
「ですから！危険すぎます。お嬢様が危険にさらされる道理などありません。ここは是非私めに行かせてください！！」
「いいえ、私が行きますわ。相手は魔導の宗家、ヴァレリアンの人間なのです。私の魔法がどこまで通じるか試してみたいのです」

その言葉に清風は俯いて絞り出すように声を出す。

「・・・そんなに私の実力が足りませんか？そんなに・・・」

レーナは首を横に振ると清風に近付き、そっと両頬を支えて正面を向かせる。

「いいえ、私はあなたに頼り切りでした。私もあなたを守りたいのです。それに、私ではハルドルーク卿もレストリア卿にも勝つ術が思いつきません。ねぇ清風。私は護られるだけの当主にはなりたくないのです。あなたと共に、私も闘ってはいけませんか？」

「勿体なきお言葉、しかしそれがレーナ様のお望みならば」

清風も迷いなく舞台から降り、しかし厳しい目で舞台を見つめる。

小さい声だったが武人であるハルクとレスティ、それに近くにいたクリスは聞こえていた。

（（（心構えが他とは違うな。これは厳しい戦いになりそうだ））））

「お待たせしました。クリディアネス卿、いざ尋常に手合わせを願います」

その様子に困ったような笑顔を向けるクリス。

「そんな礼儀正しくなくてもいいんじゃないかな？授業の一環なんだしさ」

「貴族たる者、礼節なくしてどうしますか？」

「・・・それは貴族しか礼節がないという意味かな？」

「・・・・・・ふむ。これは失言でした。撤回致します。人たる者、ですわね」

心の内から申し訳なさそうな声音に、クリスのレーナに対する感じは一気に良くなる。

「君とは良い友達になれそうな気がするよ」

「クリディアネス卿に言われるとは光栄なことですわ」

2人はようやく戦闘態勢に入り、お互いに杖を相手に定める。これで両者いつでも魔法詠唱を開始できるようになった。

「ふむ、では・・・試合開始！！！」

拝啓　愛する妹よ

第1試合は貴族と騎士見習いだぞ

こっちはクリスって大のつく貴族だ
兄ちゃんの2人目の友達だな
このクリスとハルクと兄ちゃんがチームを組んで、
闘うことになるだろうな

組み手を他の奴とやるのは初めてだ
果たしてどうなるかな

お前の兄より

第６話　風ＶＳ風

「試合開始！！！」

ミューズ先生はそう宣言すると、すぐに舞台から飛び降りた。

同時に舞台の２人はバックステップで距離を取る。

２人の距離は１０ｍ

１人は金髪、わずかに幼さが残りながらも年齢は成人である１６歳の少女。

【レーネ＝ウィンドネル】

鮮やかな翠色のローブを羽織り、サファイアが付いたロッドを両手で正面に構えている。

翠色とサファイアは風魔法を操ることに長けている証拠である。

対するは緑髪、生徒というより学者と言った方がしっくりくる、眼鏡をかけた青年。

【クリディアネス＝ヴァレリアン】

試合が始まる前の穏やかな笑みは消え、眼差しは真剣そのもの。

羽織る物は魔法使いの愛用するローブではなくコート。

見た目は市で売っている安物のだが、良く見ると最高級の素材で織られているのが分かる。

右手に長杖を持ち、左手で杖先の水晶に魔力を込めている。

１０秒・・・２０秒・・・３０秒・・・１分・・・

２人は微動だにしない。

しかしレーネのロッドのサファイアと、クリスの長杖の水晶の輝きは大きさを増していく。

その光景にゴクリとつばを呑む音が舞台の外から聞こえる。

そこに居合わせる生徒たちは何が起きているかを正確に把握していた。

中級魔法のぶつかり合い。

通常、生徒の中には中級魔法を扱える物など居やしない。

そして、師を仰いで１人前の魔法師になった所で、やっと中級魔法が使えるようになる。

しかもこれは魔法科の生徒たちでの話である。

彼らが籍を置くのは総合科、初級魔法すら扱える物は少ない。

彼らの扱える魔法は、魔具を使った上での初級魔法にも劣る補助魔法が精々なのである。

その常識を覆すのが出来るのは、２人ともが魔法の名家出身だからである。

２人は幼い頃から英才教育を受けており、年齢が１０を超える頃には初級魔法までは習得しているのだ。

魔法の属性は、魔力光の色で判断することが出来る。

レーネの光は風属性である緑色。

クリスの光は地属性を示す茶色である。

先に動いたのはレーネの方であった。
レーネはロッドを大きく掲げて詠唱を始める。

「『天を駆ける６の刃、６の礫（つぶて）。合わせて１２の風の使いよ。彼の者へ！【嵐攻風撃（シュトルム・ヴィンディヒ）】！！！」

瞬間、クリスの周りに計１２の風魔法が顕現する。
それらは微動だにせずに浮かび続けている。

「魔法は撃たせませんわ！行け！！！」

一斉にそれらはクリスへと向かう。

クリスは、レーネの目をずっと見ていた。
それは魔法が顕現した時も、今この瞬間もだ。

「『求めるは全てを吹き飛ばす風の渦【竜の舞い（ヴィント・ホーゼ）】」

そう呟くと、クリスを中心に竜巻が姿を現した。
その竜巻の中でもレーネの魔法はクリスへと向かおうとするが、
竜巻がそれを許しはしない。

結局、全ての魔法は消え去り、竜巻はレーネに襲いかかる。
竜巻はレーネに直接的なダメージは与えないものの、
レーネはあまりの強風に吹き飛ばされそうになる。

舞台から落ちれば負け

そのルールを思い出し、レーネは竜巻の中心に身を躍らせた。
竜巻の中心には風は存在しない。
しかし中の空気は全て外に出ていこうとする為に呼吸が出来ない。
レーネは肺の中の空気をすべて吐き出しながら、魔法を紡ぐ。
「『求めるは全てを吹き飛ばす風の渦【竜の舞い（ヴィント・ホーゼ）】」
クリスの放った物と全く同じ魔法である。
ただ1つ違うのは、風の向きが逆だということ。
2つの竜巻は周りに甚大な被害を出しながらも互いに消滅する。
生徒たちは腕で顔を覆って目をつぶる。
レーネは戦闘中の為、眼はつぶらずに腕だけで風を防ぐ。
竜巻が完全に収まった時、レーネは首に何かが当たるのを感じた。
「チェックメイトだよ、レーネ嬢」
クリスはレーネの後ろに回り込み、ナイフをレーネの首に当てていた。
穏やかな笑みを浮かべ、クリスは宣言する。
対するレーネは悔しさで顔を歪ませているのかと思いきや、
その顔には笑みを浮かべていた。

レーネは素早くしゃがみこんでクリスに足払いをかけた。
クリスは受け身も取れずに尻もちをついてこける。
すぐにレーネはマウントポジションを取ろうと足に力を入れ・・・
動きを止めた。
「【風の檻(ツヴァング)】ですか。何時の間にこれを？」
レーネの両目1mm先に風の刃が鎮座していた。
さらに魔力を辿ると両足・膝・背中・後頭部にも同じ物が設置されていた。
「背中と後頭部は足払いを受けた時だよ。それ以外は竜の舞い(ヴィント・ホーゼ)を君が放った時だね」
クリスはコートに着いた砂埃をはたきながら立ちあがり、レーネの疑問に答えた。
「成る程、私の完敗ですわ。クリディアネス卿」
「『卿』はよしてくれないかい？僕らはまだ生徒だよ。騎士や兵士じゃない」
「・・・わかりましたわ、クリディアネス様」
「う～ん、『様』もちょっと・・・。まぁいいか、お疲れ様」
パチン

クリスは指を鳴らすと風の檻（ツヴァング）は消え去った。

レーネもまた立ちあがり、そばに寄ってくる見習い騎士である清風を見た。

「大丈夫ですか！お嬢様！？」

「大丈夫よ。クリディアネス様が手加減して下さったから」

大丈夫、そう呟いていながらも、自らの両足が震えていることにレーネは気付いていた。

中級魔法と同時に初級魔法の２重詠唱（ダブル・スペル）。

この教導院の教師達の中でも、それが使える人は果たして何人いるのか。

２重詠唱（ダブル・スペル）が使えるために

宮廷魔導師にスカウトされてもおかしくはないレベルなのである。

それを１生徒がやって見せる。

クリスが以前から【神童】と取り沙汰されて来たことは知っているが、

それでも実際にその実力を目の当たりにすることは大きく違う。

クリスの将来を思うと、レーネは震えを抑えることが出来なかった。

「おつかれさま」

舞台から降りて来たクリスにレスティは声をかける。

「ありがとう」

労わったレスティとは逆にハルクは、
「お前ならもっと早く終わらせられただろ」
その言葉にクリスは肩をすくめて見せる。
「これでも頑張った方なんだけどね。ハルクは厳しいね」
「お前が緩すぎるんだよ。アレを使えば数秒で終わったものを」
「アレは最終手段だからね。それにこんな所であまり手の内を見せられないしね」
レスティは首をかしげるも、
「アレが何なのかは知らないが、竜巻を出したから試合は俺達からはほとんど見えなかったぞ」
レスティのその言葉にクリスは本当に驚く。
「え？そうなのかい？それは全く考えてなかったよ。じゃあ最後のは？」
「『設置型』『見えない』って事で【風の檻（ツヴァング）】だとは分かったがお前とレーネとの会話は聞き取れなかったな。風で耳を若干の間やられてたしな」
クリスは目をしばたたかせると、面白くなさそうに。
「そうなのか。じゃあレスティに僕の恰好良さを見せつけることは

出来なかったのか」

がっくりと肩を落とすクリスに、唇を吊り上げたハルクがその肩に手を置く。

「いや、それは大丈夫だろ」

クリスはハルクを見て訳を促すと、

「気が付けよ。こいつ、今【風の檻(ツヴァング)】って言ったろ？それに、試合中も【竜の舞い(ヴィント・ホーゼ)】って言ってたぞ。『竜巻』じゃなくてな。レスティの出身は農家だ。いち農家が魔法名を知ってる筈がない。更には『設置型』何かの特性まで知ってる。だから【竜の舞い(ヴィント・ホーゼ)】が中級魔法であることも知ってる筈だ。だから安心しろ」

クリスはこの言葉にハッとして満面の笑みを浮かべる。

「そうか！それならいいや！・・・でもレスティ、魔法なんてどこで習ったんだい？」

レスティは教えるかを悩んでいたが、

「あー・・・。親友に教えて貰ったんだ。魔法が使える賊が来ても対処できるようにな」

「じゃあレスティも魔法が使えるのかい？」

「体力強化とか硬化とか癒しの補助魔法ならなんとか・・・」

この返答に2人はギョッと目を見開く。

そして口をパクパクさせるハルクの代わりにクリスが尋ねる。
「レスティ、本当に癒しの魔法が使えるのかい？」
顔を近付けてくるクリスに若干引きながらも、
「あ、ああ・・・。やってみせるよ」
そう言ってレスティはクリスの頬に軽く触れる。
クリスは痛みを感じて見ると、そこからは一筋の血が流れていた。
どうやらクリスもレーネの攻撃を受けていたらしかった。
そしてレスティは手に魔力を送る。
するとすぐに手が白く淡く光り、手をどける。
クリスは恐る恐る傷口を触ると、傷は完全に消えていた。
それを見届けたハルクは重い口を開く。
「レスティ、癒しの魔法は補助魔法なんかじゃない」
「・・・え？」
「・・・・・・上級魔法だ」
「・・・はぁ？冗談だろ？？」
クリスもレスティに言い聞かせる。
「ハルクの言っていることは本当だ。癒しの魔法は高位神官にしか

扱えない上級、珍しさから言えば最上級魔法だ。これからはむやみに使わない方が良いよ。誰が何をするか分からない」

「・・・それにしても、お前は本当に誰に教わったんだ？」

「俺の親友だよ。ハルクには見せたろ？この刀をくれた奴だ」

そう言ってレスティは腰の倭刀を掴む。

「確かにそれからも不思議な魔力を感じるね。それも君の親友の物だったのかい？」

ハルクは既に話が耳に入らずに厳しい目付きで考えていた。

（癒しの魔法を使える上に不可思議な魔力の倭刀を持つ・・・一体、何者なんだ？）

拝啓　愛する妹よ

クリスは学者風な見た目とは裏腹に、とても強いようだ
そして見た目通りに小さい所にまで魔法を駆使するんだ

ところで、アゾットは俺に色々な事を教わったが
それはどうやら普通の事じゃないらしい

帰ったらそこの所も問いたださなきゃな

お前の兄より

第7話　圧倒（前書き）

４ヶ月近くぶりの更新です。
遅くなりすみませんでした。

第7話　圧倒

「さて、次の試合。俺が行くけど構わねぇか、レスティ？」

「逆に出たくないな。無意味に闘ってこれ以上目立ちたくないからな」

レスティに了承を求めながらも、ハルクは既に舞台への階段を登り始めていた。

「無意味って言ったって、これも一応授業の一環なんだけどね」

クリスは困ったように苦笑いである。

レスティがこんなことを言えるのにも訳がある。

というのも、授業態度が悪い為に他の生徒の授業を妨害するほどでなければ殆ど許されるからである。何故そんなことがまかり通るかと言えば、そもそものテクティーナ教導院は実力のある人物を輩出するための施設であり、ただ授業態度が悪いだけで放逐し、後々国家の敵になるのは望ましくない。ならば多少の事には目を瞑っておいてやろうというのである。当然、その代わりに生徒の卒業後の進路には大きな制限が設けられている。騎士や自警団などの国家の下部組織・【自立型冒険者】などなら許されているが、【ギルド付き冒険者】や傭兵は許されておらず、なお無視して成った場合には国家機密諜報罪
が適用され、スパイとして指名手配されることとなる。

【自立型冒険者】

一般の冒険者
『冒険者』と言えば、この自立型冒険者とＳ～ＳＳＳクラスを指すことが多い
冒険者のクラスはＦ～Ａ
一般市民からの依頼を受けることで報酬がもらえる
登録時には多少の手数料が掛かる
庶民から王族、奴隷から騎士までだれでも登録が可能

【ギルド付き冒険者】
冒険者が職業な人
冒険者のクラスはＢ～ＳＳＳ
仕事は受付や事務仕事、探索や依頼人の身辺調査などさまざまである
自立型ど同様に依頼の実をこなす冒険者もいる
Ｓクラス以上は強制的にギルド付き冒険者扱いとなる
事務方の仕事は引退した冒険者が成ることが多い

「それにこの試合の目的も、実力を確かめるためだから闘わないって選択肢はないと思うんだけどね」

「そのときは諦めるさ」

レスティはため息を漏らした。

ハルクは槍を体全体を使ってクルクルと回していく。

クリスが言うには、あの回す順番も決まっており、何らかの呪(まじな)い行為の一種なのではないかとクリスは考えているらしい。実際に幼い頃にクリスがハルクに聞いてみたところ、ハルク自身詳しいことは何も知らないらしい。

「ハルドルーク様。今のあなたでは私に勝てません。おとなしく棄権をして下さい」

「どういう意味だ？」

不機嫌さを明らかに顔に出して聞くが、騎士見習いの青年ファーラ＝リンクスは気付かずに答える。

「ハルドルーク様の先程のクリディアネス様と下賤な民との会話をお伺いいたしましたら、試合とは言えいささか覚悟が足りないものと考えます。そもそも闘いと言うのは・・・」

「黙れよテメェ。何様のつもりだぁ一体」

「し、しかし！わ、私はハルドルーク様を思って・・・」

ハルクから噴き出した殺気に怯むファーラ

「偉くなったもんだなぁ。騎士見習いごときがこの俺に闘いの何たるかを語るとは！どうやらテメェは俺が誰かを知らないらしいな」

ハルクの言葉を聞いていくにつれて、ファーラの顔はだんだんと青くなっていく。

今更ながら自分のした行為がどういうものかを思い知る。

代々国軍の軍団長を輩出するベネスター公爵家。軍団長の肩書きは名前だけではない。軍団長を、ベネスター家の当主を代える際にはとある儀式が存在する。それは、副団長と一騎打ちして勝つことである。それが成し遂げられない限り軍団長を交代することが出来な

い。この規則によって、軍団長が死亡後、１０年以上に渡り軍団長不在の時期もあったほどだ。そのためベネスター家時期当主には熾烈なまでの修行を課せられる。規則とはいえ軍団長不在の時期を出すわけにはいかないからだ。

その時期当主であるハルクに対して闘いを説くことは釈迦に説法なのである。

「し、失礼しま「今更謝罪はいらん！お前は俺に説教するほどに強いんだろう。なら試合の中で教えてみやがれ！」・・・！！！」

ハルクは模擬槍を構え、ファーラも慌てて騎士剣の形をした模擬剣を構えた。

いつの間にか舞台に登って来ていたミューズが眠そうにしながらも叫ぶ

「では・・・始め！！」

開始直後、ハルクは風を切りながら思い切り槍を突き出す。
それはまさに必殺の一撃だった。
ファーラは何とか槍をそらすも、よく見ると剣の一部が抉り取られている。

伸びきったハルクの腕を斬りつけようとファーラは剣を操るが、
ハルクは素早く柄の端である石突を踏む。
すると槍が回転して穂先がファーラの頭を切り裂こうとする。

ファーラは横に転がるように飛んで受身を取って距離をとろうとす

るが、それを易々と許すハルクではない。回転を始めた槍の石突を正確に今度は横に蹴り、縦に回転しようとした槍は横に回転する。

流石にそれはファーラも予想しておらずスネに当たって無様にこける。そこに容赦のないハルクの攻撃が降り注ぐ。ハルクは石突をファーラの四肢に突いて抵抗力を削ぐためだ。石突が当たるたび、ファーラはあまりの痛みに赤子のように叫ぶことしかできない。

その間にも石突は確実に四肢を砕いていく。

手首・肘・肩・足首・膝・両股・・・。主な関節は破壊されつくした。

もうファーラは口から泡を吹き、白目を剥いていた。何か小さな衝撃さえあれば気絶するだろう。周りで見学していた生徒達のほとんどは余りの行為に青ざめて震えている。

例外はレスティとクリス、そしてミューズぐらいなものだろう。とは言え3人も絶句していたが・・・。

ようやくハルクは攻撃の手を止め、冷徹な目でファーラを見下ろす。ハルクはファーラを見たまま槍を半回転させて構える。ファーラの息の根を止めるために。

ハルクは呼吸するように槍をファーラの心臓に突いた。

拝啓　愛する妹よ

ハルクが怒りが沸点を超えたようだ
兄ちゃんはその時はあまりの出来事に呆然としていたよ
ハルクが起こった原因は、対戦相手が無礼な事を言ったからみたいだ

例えるなら、野菜を知り尽くしているファム婆に
野菜についてくどくど語っちゃったんだ
そんなことをすればファム婆も怒るよなぁ

また今度ファム婆の作った野菜が食べたいよ

お前の兄より

第8話　演習の終わり

腕を伸ばし切ってハルクの放つ必殺の槍はファーラの喉を突き破る

・・・のを寸での所で止めたのは、レスティだった。

レスティが背負っていた大剣の腹で、ハルクの槍を受け止めていた。傍目から見ると容易くしているように見えるが、レスティは冷や汗が止まらなかった。

（何て鋭い突きだ。少しでも気を抜くと穂先が滑って俺が貫かれる。力を抜いても同じ結果になるだろう。・・・さて、ここからどうハルクを我に返そうかな）

「『我が求めるは恐怖。深淵で壮大なる者をも愕する揺らぎ。響け。響け。響け。其の力を持って我が意を成せ』【剛巨の地鳴り（ジガンテ・ゲロイシュ）】」

ズゥン

地の底より強大な殺気と供に強烈な地鳴りが起きた。

クリスの魔法援護だ。その魔法現象はハルクの本能に警鐘を鳴らし、とっさに飛び退いていた。

レスティはそれを確認すると同時に、足でファーラの体を思い切り場外に蹴り飛ばしていた。

「がはっ！！」

ファーラが苦痛の声を上げたが気にした事ではない。

レスティは遠くで今だ槍を構えているハルクを見遣る。
（なんでまだ構えを解かない！？もう構えを解いていいはずだろうが！）
レスティは正眼に大剣を構える。
レスティからはハルクの表情をうかがうことは出来ない。
ハルクが動いた。
レスティは横に跳んで避ける。
立ち上がりざまに追撃を受けるが大剣を器用に操り全てをさばく。
（速い、まるで風みたいだ。それにさっきも受けたが何て鋭いんだ！・・・仕方ない、プライドとか言ってる場合じゃないな）
考えている間にも、何十もの突きが襲いかかってくる。
レスティはその１つに向かって大剣の刃をぶつけ、槍をはじき返した。
今までずっと受けに回っていたため、ハルクの対応が遅れた。
そんなハルクの頬に、レスティは大剣の腹で思い切り殴り飛ばした。
場外に飛ばされ、１０ｍ以上バウンドした後、ハルクはピクリとも動かなくなった。
「怪我人が出たようだな。レストリア、ファーラを医務室に運んでやれ！レーネは付き添いを。クリディアネス、お前はハルドルークを介抱してやれ！どうせ脳しんとうだろう。他の奴は解散！次の授業もここで練習試合をするからな。遅れるなよ」
ミューズはそう指示を出すと、頭を掻きながら職員棟に帰って行っ

た。
するとすぐにクリスが駆け寄ってきた。
「ミューズ先生の言う通り、脳しんとうだったよ。それにしても、ミューズ先生も先生らしくハルクを止めるのを手伝ってくれてもいいのに・・・」
クリスはそうぼやくと、レスティは真面目な様子で言葉を返す。
その瞳は、先程の戦闘を思い起こしていた。
「いや、あの先生に俺は助けられてたよ。最初に俺が大剣でハルクの槍を阻んだ時、わずかに大剣と槍の間に風の魔法を感じた。おそらく先生が魔法を使って槍の威力を軽減してたんだろう。その後も、時々指が動くのが見えたから、何らかの魔法を行使してたんだろう。何の魔法かは分からなかったけどな」
「あの・・・」
話し込んでいた2人に遠慮がちな声が割り込む。
その声のする方を2人が振り向くと、そこに立っていたのはレーネであった。
「この度の私の従者がご迷惑をお掛けしたこと、深くお詫びいたしますわ」
そう言って深く頭を下げる。
その行為は並の貴族ではできる事ではない。
普通の貴族では、良くて無視。悪くて難癖を付けて謝らせようとするのだ。

「頭を上げてくれ。レーネ＝ウィンドネル。俺らは別に気にしていない。むしろハルクがお前の従者に大怪我を負わせてしまった事を逆に謝らせて欲しい。すまなかった」

逆にレスティもレーネに謝る。

「それはそうとレスティ。ファーラをどうやって運ぶ気だい？」

「どうって・・・。こう、肩に担いで？」

「それはご容赦いただけるとありがたいです。私にとってファーラはこれからも必要な従者なので」

レーネのお願いに困るレスティと苦笑するクリス。
確かに、レスティの言ったように、四肢に大けがを負ったファーラを担いで運んだとしたら、ファーラはボロボロになってしまうだろう。

「『汝の加護より、此の者の身を浮かせ』【浮遊（リヒト）】」

クリスが呪文を放つと、ファーラの体が黄緑色に薄く発光し始めた。

「・・・ふぅ。これで１０分は羽毛程度の軽さで運べるよ」

そんなこんなで、レスティはレーネと一緒にファーラを御姫様だっこで医務室へと運ぶこととなった。

～～～～～医務室前～～～～～

「もうここでいいだろ。レーネ、お前はもう教室へ帰れ。お前は次も授業があるんだろ？俺は今ので今日の授業は終わりだ。後は俺がやっとくから」

「そうですか。では、１つだけいいですか？」

「何だ？」

「これからは私の事をレーネとお呼び下さい」

「・・・・・・分かった。レーネ、もう行け」

「では、お言葉に甘えて、失礼いたします。レストリア様」

レーネはもう１度頭を下げると、小走りで医務室から去って行った。

（・・・ふぅ。今日は面倒な１日だったな。さっさとこいつを寝かせて帰るとするか）

レスティは扉をノックして中へと入る。

コンコン

「失礼します。先生、いらっしゃいますか？」

中に入るも、誰もいなかった。

レスティは仕方なく、ファーラをベッドに寝かすと椅子に座って先生を待つことにした。

暫らくすると、１人の女子生徒が入ってきた。制服の色から判断するに、１年生である。

「どうしたんだ？先生ならいないぞ」

女子生徒は、『清楚』と言う言葉がぴったりと似会う少女だった。金の長い髪を持ち、白い肌に小さな目、ピンク色の唇の綺麗な生徒である。

「ええ、存じ上げておりますわ。先生は今日は出張で帰ってきません。先生に何か御用件でしょうか？私がお伺いいたしますが？」

「ん？ああ、実はな。俺のクラスで戦闘演習があったんだが、そこで生徒の1人が大怪我を負ってな。治療を頼みたくて来たんだよ。しかし困ったな。先生がいないとは、どうしたもんか」

「その生徒はどちらに？まだ演習場ですか？」

「いや、そこのベッドに寝かせてある。一応、応急処置はしているがこっちは救護のプロじゃない。このまま放置しておくわけにはいかないからな。なぁ、あんたは魔法科の生徒だろう？痛みを和らげる魔法は使えないのか？」

「そのような魔法は・・・。申し訳ありません。でも、違う魔法なら使えますわ。少々お待ちを」

少女はおもむろにポケットから魔精石を取り出すと、両手で包み込んで祈り始める。

「『偉大なる光の精霊達よ。我が意の元に此の者に癒しの加護を与えたまえ』【治癒（キュア）】」

じっとりと少女は汗をかきながらも、なおも祈り続ける。
少女から放たれた魔力は、次第にファーラを包み込み、
怪我した部分が徐々に癒えているのが見てとれる。

「・・・・・ふぅ。これで、この方はもう大丈夫ですわ。今日1日、ここで寝れる許可申請をこちらで出しておきます。あなたも、もう教室に戻られても大丈夫ですよ」

名も知らぬ少女の笑顔を見たレスティは、柄にもなく思った。

（まるで・・・。まるで古書に出てくる聖母様みたいな人だな）

レスティは、ぼうっとしたまま医務室を出て、教室の自分の荷物を取りに帰った。

拝啓　愛する妹よ

戦闘演習が終わったよ
同級生が1人怪我をして、医務室に連れていったんだ

俺はそこで、聖母様のような女子生徒に会ったよ
名前も知らない、でも、彼女は本当に綺麗だった。

お前にも見せてやりたかったよ
彼女の笑顔は本当に素敵だった

お前の兄より

第8話　演習の終わり（後書き）

時間割は個人によって違います。

大学と同じと言えば、分かりやすいでしょうか？

第9話　小さくも大きい問題（前書き）

パソコンが狂いました。不本意ながら、今話で書き収めです（；ω；）

第9話　小さくも大きい問題

レグルス協和同盟の盟主、ブクリア国

ブクリア国は１８の地域に分けられ、その内の１５の領主による議会によって運営されている。
なお、この領主というのは、全員が前世紀における大貴族たちが列席していた。
議長は首都を治めるグレンナ家が。副議長は国内で２番目に発展しているヴァレンシア家が務めている。

また、政治部門とは別に、王家、軍部の存在も忘れてはならない。

議会の決定に対する最終決定権は国王のみが所持している。これはつまり、国王が是と言えば是、否と言えば否となる。その代わり、議会が満場一致で不服申し立てをすれば、国民投票が行われ、その決定は例え国王でさえも覆すことは出来ない。だがしかし、建国以来、そのような事例が起こった事は一度たりともないわけだが・・・。

次に軍部。ブクリア国軍団長は代々ベネスター家が務め、当主は国より二つ名【国剣】を賜る。軍部は８の師団で構成され、それぞれの師団長は一癖も二癖もある者ばかりである。任命権はベネスター家当主が所持している。師団長になるための資格は３つ。忠誠心・強さ・統率力である。このため、８師団の内の３師団長が平民出身である。

また、ベネスター家は軍部のトップであるため、議員に列席してい

ない。
残る2つの議員でない領主は、『知識の都』として名高く、大陸図書館を有する街を治め、【国盾】が当主のヴァレリアン家。そして、レスティ達の通うテクティーナ教導院を有し、【国癒】が当主のテクティーナ家である。

この2つの家の話は割愛するとしよう・・・。

ともあれ、テクティーナ領は首都には劣るものの、かなり発展している街であるのだ。
だとすれば、レスティが抱える問題も頷けるというものだろう。

「・・・はぁ、困った」

学生食堂の一角で、重いため息をつきながらレスティは頭を抱えていた。

そこに、クリスとハルクがやってきた。
相変わらず取り巻きたちがいたが、レスティに近付いていく2人を見ると、そそくさと退散していった。どうやら先日も演習の件が広まったようなのだ。特殊な状況とはいえ、ベネスター家の嫡子を相手に一歩も引かなかったのだ。さらにレスティは平民とはいえ、大貴族のクリスやハルクと仲が良い。いくら気に入らないからと言って、権力や実力でどうにか出来る事が無いのは明白であったからだ。

「どうした？辛気臭い雰囲気をして」

「ん？・・・あぁ、お前たちか。どうもこうも、金欠でな。明日の昼飯の事すらもすら悩んでるんだ」

2人はきょとんとしてレスティを見た後、とある事実を思い出す。

そう、レスティはただの平民である。

実力があれば少ないお金で入れるテクティーナ教導院だが、「少ないお金」といってもそれは貴族達にとってである。商家ではそれなりの金額、平民では莫大な金額であることには変わりない。

一足早く事態を理解したクリスは、頬を掻きながら言う。

「そういえば、レスティは平民出身だったんだよね。どこの出身なんだい？」

「ジャンバーナ領の小さな町さ。町と言っても、村の方が近いかもしれないけどな」

「失礼だけど、学費はどうしてるんだい？奨学金・・・じゃないよね？あれにはある程度名のある身分の後援者を持った人しか駄目だったはずだし」

「いや、一芸があるだろ。レスティの強さなら一芸で奨学金が貰えたはずだ」

遅れてハルクが話に入る。

「奨学金は貰ってない。一芸というのも、今初めて聞いたしな。それで学費の話だけど、実は親友が工面してくれたんだ」

「すごいな。その彼か彼女は、商家の子か何かなのかい？」

親友とはいえ、安くは無い学費を肩代わりしたのだ。それなりに大きい商家なのだろうと、クリスは考えた。今、彼の頭の中にはジャンバーナで活躍している商家の家名を幾つも思い浮かべていた。

「男だよ。そいつも俺と同じただの平民なんだ。ただ、そいつは冒険者で、貯金していたお金で、俺を入学させたんだ」

馬鹿だろ、せっかくのお金を俺みたいな奴に。そう付け加えてレスティは苦笑した。

【冒険者】

世界に存在する2大陸、レグルス大陸とファーラム大陸。その中間に存在する大きな島。

その島にはある施設が存在する。それは『ギルド』という組織である。

ギルドは人々の生活の中に根を張り、あらゆる人の依頼を冒険者に仲介している。

数十年前には巨大国家にも負けない戦力を保持していたが、それも衰退して等しい。

冒険者は実力によってクラスが区分され、強い方からS・A・B・C・D・Eクラスである。

人並みに自分の腕に自信のある者なら、誰もが冒険者になっているため、冒険者の人口は今でも増加して行っている。

「へぇ、冒険者か。そいつがレスティの刀の元の持ち主なんだろ？もしかして、東国の『サムライ』だとか『ブシドー』とかって奴か？」

「んー。実はそいつの事は良く分からないんだ。ただ、黒髪黒瞳で東国の面立ちはあるから、もしかしたらそうなのかもな」

「良く分からない？彼とは何年の付き合いなんだい？」

「俺が３歳の時からだから・・・１３年か？」

「へぇ～、１３年前か～。・・・・・・ってお前１６なのかよ！？年下じゃねぇか！！」

驚くハルクにポカンとしたのはレスティだ。

「言ってなかったっけ？２人は何歳なんだ？」

言ってねぇ！と喚(わめ)くハルクを横目に、クリスは言う。

「僕もハルクも１７歳だよ。来月で１８になるんだ。でだよ。お金はそんなに危ないの？」

レスティは財布を取り出して中を恨みがましそうに見る。

「あぁ。こうなったら街の外に出て、何か狩ってくるしかないか。あぁ！面倒だ！！」

レスティのこの発想に、クリスは笑みを引き攣らせる。

「へ、へぇ。あのさ、狩った魔物はどうするの？」

「ん？そんなの決まってるじゃんか。肉は食って、毛皮と内臓は売

りさばく。魔物によっては角や牙も高く売れるしな」

何を当たり前のことを。とそんな目で、レスティは2人を見る。今度はハルクまでも顔を引き攣らせる。

「あのよ、レスティ。お前の村は皆そんな生活だったのか？」

「う～ん。いや、俺と親友だけだな。他の皆は飼っていた牛や羊の乳と、森で採ってきた木の実とかしか食べなかったから。そもそも皆は肉を食べないかったな」

「非常に言いにくいんだが・・・。通常は、俺の知る限りではだけど、普通の動物はともかく、魔物を食べる習慣を持つ地域は無いぞ？肉以外の部位は今言っていた通りなんだがな」

あいた口が塞がらないとはまさにこのことだった。

「あいつー！騙しやがったな！！何が、「他の地域なら当たり前のように食べてる」だよ！！」

「ま、まぁ、これからは狩った魔物をギルドに売ったらどうかな？それで、依頼があるなら、そこに回せばいいし。レスティはギルドに登録しているの？」

「うちの町はギルドは無かったから登録してないな。登録はどこでも出来るのか？」

「ああ、身分証明書・・・は学生証でいけたな。よし、これからギルドに行くとするか～」

拝啓　敬愛する親友へ

よくも騙してくれやがってありがとうよ
魔物の肉は食べないんだってな。今日初めて知ったよ
それはそうと、金が無くなったからギルド登録に行くことになったぜ
学費の件はありがとうな
まだ暫らくは妹の事を頼むよ

嘘吐いた奴の親友より

第9話　小さくも大きい問題（後書き）

動物≠魔物です

動物は現実世界と同様の扱いですが、魔物は肉以外を使用します。
また、動物を飼育しても、魔物を飼育することはそうありません。
例外としては、騎乗用の走竜（ランドドラゴン）や亜飛竜（ワイバーン）等です。

動物と魔物の一番の違いは、体内に魔素を蓄積しているかどうかです。
通常、魔物の肉を食べると、人体に魔素が溜まり、悪影響を及ぼすと考えられています。

また、ギルドでは市場の発展のため、少額ながら、魔物の素材を買い取りしています。

第１０話　冒険者とは

３人は、教導院から３０分ほどの所に立っているギルド支部へと来ていた。

ギルドは、お小遣いを求める子供も、日々の生活費を求める大人も入会している。
ギルドに入会している者は誰もが「冒険者」と呼ばれ、腕の立つ一部の者たちは羨望の眼差しで見られている。

ギルドの成立は１０００年近く前にさかのぼり、様々な変遷を遂げては来たが、その本質は変わらない。人々は困ったことがあればギルドを通して誰かに助けを求める。多少の金銭や物品は必要になるものの、その代わりに助けを探す手間が向うからやってくるのである。

現在、全ての国々にギルドの根は広がっており、更にギルドはこれらの過程で手に入れた物品から市場を形成して、大国にとっても無視できない経済効果が生まれていた。

「そういえば、何でここに来たんだ？確か教導院の中にもギルドが特別に設置されているんじゃなかったか？」

そう。テクティーナ教導院の生徒の中にも冒険者は数多く存在するため、特例措置としてギルドは教導院の内部に「出張ギルド」として設置されている。この措置のおかげで、今３人がいる支部に生徒が埋めつくすという事態に陥っていない。

レスティのその疑問に答えたのは、何故かきょろきょろとあたりを見回しているクリスだ。

「教導院にあるギルドは、依頼（クエスト）を受注と達成報告しかできないんだよ。登録はここのギルドでしかできないんだよね。あ、そういえば、ちゃんと生徒証明書は持ってる？」

「生徒証明書って、この学生証でいいんだろ？」

「ん、それでいいぜ。それを持って、8番窓口に登録手続きしてこいよ。俺とクリスは、ちょっと別の用があるからいったん解散だな。手続きが終わったら、ここの待合室か2階にあるカフェでも行って待っててくれ。といっても、俺達の方が先に終わるかもしれないがな。クリスもそれでいいか？」

「2人もここに何かあるのか？」

「うん、まぁ・・・ちょっとね」

クリスにしては歯切れの悪くそう言って苦笑する。
どうやらあまり詮索して欲しくないのだろうと、レスティは聞く事を諦めた。

「そっか、じゃあまた後でな」

「8番、8番、8番は～・・・と」

「8番窓口をお探しですか？」

８番窓口を探していたレスティは、後ろから突然声をかけられた。後ろを振り向くと、そこには笑顔の老婆が立っていた。
６０に近いだろうか。彼女の背はピンとしていて、その笑顔は安らぎを与える。比べること自体が間違っているのだろうが、レスティは以前保健室で出会った少女の事を思い出していた。あの少女を女神とするならば、この女性は聖母だと。

「８番窓口は一般窓口とは少し離れていましてね、こちらですよ。・・・・・あらまあ、誰もいませんね。仕方ありません。代理で私が入りましょうか。少し待ってちょうだいね」

どうやら彼女はギルド職員の１人であったようだ。
レスティは、受付嬢たちは基本的に若い女性だったために、この老婆を人の良い一般の人だと考えていたのだ。

数分もしない内に、窓口の向こうから件の女性が現れた。

「待たせちゃってごめんなさいね。この年になると、どうも体が鈍っちゃってね。それで、この窓口を探してたって事は、新規の登録かしら？」

「あ、はい」

「手に持ってるのはテクティーナ教導院の学生証ね。少し貸してもらえるかしら。学生番号を写すから」

レスティは学生証を渡すと、彼女はスラスラと用紙に番号を書き写す。そして、上から順番に空欄を埋めていく。空欄が２つを残して全て埋まると、ペンと学生証と一緒にレスティに差し出された。

「ここに学科を、ここには名前を書いてちょうだい」
学生証を財布にしまうと、言われたとおりに書く。
女性はレスティが書くのをにこにこしながら覗き込んでいる。
「そうごうか、レストリア・・・あら？家名はどうしたの？」
「俺・・・自分は家名はありません。平民ですので」
通常、平民に加盟は存在しない。貴族はもとより、商家は他家との区別の為に家名を付けるのだが、平民はその必要性が無いためである。
「故郷の村や町の名前は何て言うのかしら？平民さんの場合はそれが家名になるのよ。それとも、姓名と書いてと言った方が分かりやすかったかしら？」
レストティの故郷の村の名前は「ウェズディ」である。だから、レストリア＝ウェズディ、そう書き加えた。
「はい、お預かりするわ。それと、こっちの紙にもあなたの姓名を書いてね。ただし内容は熟読する事ね」
レスティは一読して、頭の中で内容をまとめていた。
簡単に言うと、「例え依頼（クエスト）中に死んでも自己責任。死んだ後の処理はギルドに一任する」と言うことだ。この言葉の重みを噛みしめながら、さっきより少し強い力で署名した。
そしてレスティはその紙を彼女に返すと、彼女は唐突に語り始めた。

彼女の顔から笑みは無くなり、代わりに残るは歴戦の勇士の如き威圧感である。

「冒険者は元々、未開拓の地を冒険して、住める土地かどうかを検分する役目を持った偉大な先達の総称だったのです。それがいつしかギルドを仲介しての仕事となりました。別にそれが悪い事だとは言わいません。それが時代の流れだったのでしょうから。おかげで平民たちにも根が広がって、暮らしを豊かにしたからね。でも、忘れてはいけませんよ。あなた達冒険者の仕事が多いということは、助けを求める人もたくさんいるということなのです。これからあなたに求められるのは結果だけではありません。結果を出すのは大前提、その上でいつも最良の過程で依頼をこなして下さい。それが出来ないなら、あなたに冒険者を名乗る資格はありません」

レスティは今、心の底から後悔していた。
自分がここにいる理由、冒険者になろうとした理由は、お金稼ぎのためである。お金の事以外は何も考えていなかった。だがしかし、この老婆の話を聞いて、心が変わった。

お金稼ぎには変わりはない。しかし、それは最低限で構わないと。地道にやって行く事、自分のベストを尽くすことが先達への敬意となると分かったからだ。
そして、妹と親友とした約束にもつながるだろうとも考えていた。

「自分が真の冒険者になれるかは分かりません。でも、自分や依頼者に胸を張れるように生きたいと思います」

レスティを暫らく眺めた彼女は、フと再び優しく微笑んだ。

そこへ、台を持った女性が2人の元へと現れた。

その台には銀色に光る1枚のカードが乗せられていた。
老婆はカードを包むように受け止めると、レスティに無言で差し出した。

レスティも無言で受け取り、そのまま踵を返してその場を去った。
もはや2人には語るべき言葉は見つからなかった。

「嬉しそうな顔をされていますね。何かあったのですか？」

レスティのギルドカードを持ってきた受付嬢は、いつもよりも嬉々としている表情を隠さない老婆に尋ねた。

「彼ね、私の古い友人に似ているの。その友人はね、いつでもあらゆる事と独りで戦っていたの。誰もが友人の隣で戦いたいと願って力を尽くした。それを知った友人は、彼等を隣に置きながらも、死人が出そうな戦場に赴く時は必ず1人で行ってしまうの。『お前はまだ俺の足元にも及ばない。俺が全力で戦うには邪魔だ、うぜぇ』それが友人の口癖だったわ」

「それは・・・独りよがりな方だったんですね」

「そう思うでしょ？でも違うのよ。その友人は、知り合いで死人が出ることをひどく嫌ったの。そうしてあらゆる戦いが終わった時、友人の周りには敵しかいなかったわ。友人の隣を目指した人間もまた、彼を理解できず、敵となってしまったの」

「・・・」

「馬鹿よね。でもね、友人はある使命感を帯びていた。その顔が、今の彼の顔とそっくりだったのよ」

「彼は、大丈夫でしょうか？」

「冒険者として大成するかは分からない。でも、1人の人間としては立派に成長するでしょうね。例え道から外れてしまっても、それを正すのが、私達大人です。分かっていますね？」

「はい！アマーリア様！」

受付嬢は元気よく老婆に、ギルドのトップである【ギルド総裁】のアマーリアに返事をした。

アマーリアの正体をレスティが知る日は来るのだろうか・・・。

拝啓　経験豊富な冒険者の親友へ

俺は今日、冒険者になったぜ

これから色々な依頼（クエスト）をこなしていくんだな

俺は最初は金の為になるつもりだったんだ

でも、ある受付嬢の人から冒険者の存在意義の話を聞いたんだ

お前は既に知っているかもしれない

それでもお前にその話を聞かせてやるよ

俺は未来永劫冒険者になるつもりはない

俺の剣は妹の為にあるからな！

だからといって、依頼（クエスト）を蔑（ないがし）ろにはしない
それが冒険者の使命だからな！！

新米冒険者の親友より

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0373r/

目立つつもりは無かった。なのにどうしてこうなった！？

2012年1月7日00時52分発行